人びとの「力」

―原発立地柏崎の市長選で問われたもの－

要旨など

前田りさ

MAEDA, RISA

2017/06/23

国際基督教大学大学院
アーツ・サイエンス研究科

博士後期課程 2 年

要旨

昨年 11 月、世界一の発電容量をもつ原発の地元、新潟県柏崎市の市長選挙で、元市議で「条件付き再稼働容認」の桜井雅浩氏が、市の保健師だった竹内英子氏との一騎打ちを二倍弱の得票数で制した。選挙前、桜井氏の出馬を受けて立候補を表明し「再稼働は認めない」「避難計画を見直す」と訴えた竹内氏が善戦するかどうかは、全国の関心を集めていた。それは、前月の県知事選挙で再稼働に慎重な米山隆一氏が大方の予想に反して当選したからである。

より興味深いのは、新潟日報の市内の有権者への出口調査が、原発の再稼働に「反対」の回答者が「賛成」を上回るという結果だったことである。つまり、原発の立場以外、政治経験の有無などの評判や他の選挙公約から桜井氏を支持した有権者は、必ずしも再稼働に「賛成」ではなかった。それだけでなく、発電所の建設計画が明らかになってからの約 50 年間、原発反対とする回答者が原発推進のそれを上回るのは、今回が初めてだという。では、このちぐはぐさ、そして、「賛成」「反対」に関する歴史的な攻守逆転の背景には何があったのだろうか。

まず、同等者のなかから多数決で直接首長を選ぶという民主主義の基本的な選挙制度がこの国の地方自治の現場につくる非日常性と、柏崎に独自の文化的・社会的な事情を考える必要がある。実は、意見が対立する話題には「推進派もサイレントですよね」（40 代男性　2015 年 8 月 11 日）という、ふだんの柏崎を知る筆者にとっては、市内各地で開かれた質疑応答を含めたミニ集会や座談会、より大きな規模の演説会に人びとが集まり、市外からの参加も含め、公的な空間で発言したり話し合ったりする場に立ち合えたことが、新鮮な驚きだった。

例えば、竹内氏の座談会を筆者が訪ねたとき、ある女性は、隣近所で原発反対とは言えないと告白し、「ちょっとそういうことを言うだけで、『お前はアカか』って言われるくらいだから、しゃべりたくても言えない人はいっぱいいるんですよ」（2016 年 11 月 7 日）と言った。選挙日前日、市内の図書館近くのカフェで筆者が休んでいた時、小柄で身なりのきちんとした老女が立ち上がり、杖をついて出口へ向かいながら、「みんな、明日選挙だから。みんな、選挙行ってね。桜井さんしかいないんだから」と、その場にいる誰彼ともなく声をかけて出て行った。

確かに、原発について「賛成」「反対」に分かれて候補者が争った市長選挙は、3 期 12 年を務めた会田洋氏が市内の融和を掲げて当選した 2004 年 11 月以降、初めてのことである。その間、柏崎では、2007 年の中越沖地震で住民だけでなく柏崎刈羽原発が被災、翌年のリーマンショックの影響により地域の産業経済は低迷、2011 年 3 月の福島での過酷事故を受けて翌年に柏崎刈羽原発は停止したまま、規制当局による安全審査が継続中である。一方、福島の避難者の受け入れは事故直後に始まり、ピーク時で 2,000 人強、現在、約 700 人が暮らしている。

柏崎のこれら諸事情を踏まえたうえで、本論では、先述したちぐはぐさの要因を、両候補者の政治権力の創出のちがいにさぐっている。まず、コミュニケーションを重視したアーレントの政治権力とそれに戦略的な側面を補ったハーバーマスの議論を参照し、両候補者の最後の街頭演説を題材に、竹内氏が口にした「力」と桜井氏が票数として一括りした「力」とのちがいを考察した。さらに、この国の近年の「自治」における共同性の源泉が、何ものかの共有から、場をたまたま共にする人びとがとりくむ課題に移行しつつあることを確認したうえで、そのような脈絡において、竹内氏によるラディカルな問題提起に呼応したのが市内外の支援者のみならず一部の有権者に広がり、ふだんはノイズだった「避難計画を見直す」のような言葉を、以

前より多くの有権者がサウンドと認識することができたのではないかと、論じた。

参考

選挙期間最終日の夕方、両候補の街頭での最後のスピーチを書き起こしたテキストを、ここに再録する。分析対象として、他の日時や場所に比べてより有効と考えるのは、いわゆる浮動票を獲得する最後の機会だったからである。冷たい雨が降る中だったが、市内の中心部にいたら誰でも、時間差で、2 人の演説を聴くことができた。どちらも、事前にビラや街宣、インターネットなどで告知されていたので、住民が数ブロック離れたそれぞれの会場に集まることも可能だった。当日と同じ順番で、まず、桜井候補、次に、竹内候補である。（以下、録音データを書き起こしたテキストのうち、ノートからも判別できない発言部分を～～～、漢字が不明の場合カタカナで示す。下線は、筆者による）

１）桜井候補

桜井雅浩でございます。明日の投票日ぜひここにお集まりの皆様方のお一人お一人の思い、願い、そして、夢や希望を込めて、強くそして黒く大きな字で桜井雅浩とお書きいただきたい。そして私に柏崎の市長として仕事をさせていただきたい。まずもって心からお願いを申しあげます。

26 年間の歳月が経ちました。28 歳で私は東京の教員生活を辞め、もっと有体に申し上げるならば、教員生活を捨て、柏崎に戻り市会議員として立候補させていただきました。黄色い自転車をみんなと共に乗り、アルミ缶を集め、牛乳パックを集め、環境問題への取り組みを訴え、分別回収を訴え、初めて 26 年前当選をさせていただきました。昨日、私が勤めていた 26 年前に勤めていた、東京の女子美術大学付属高校の職員室から、必勝を願う～～～、卒業した大学の同級生たちからも酒が届けられました。本当にありがたい。何十年も昔の話なのに、そして、皆様方に申しあげます。26 年間も皆様方から支えていただき、そしてまた、いったん政治から離れた身の上であるにもかかわらず、こうやって温かなご支援を賜っていることを、桜井雅浩、本当にありがたく、本当に感謝申し上げます。

私は、生まれてこの方、米山には、数えたこともありませんが、たぶん 300 回以上登っているでしょう。黒姫も少なくとも 50 回以上は登っているはずです。八石も同様です。八石も、オオタから登ったり、アカハから登ったり、黒姫も、トウダから登ったり、オリイから登ったり。米山は、大平、吉尾、山下、ノダオカ、それぞれの道からそれぞれの頂を目指しました。何回も何回も柏崎の山の頂きを目指しました。私も 2 回柏崎の市長というその頂を目指しましたが、力及ばずで、残念ながら、そのトップとして仕事をさせていただくことはできませんでした。

今回、今ほどお話をいただいた、本当に熱を込めた応援をいただいた、会田洋市長さんから。そしてまた前市長、私に、議員当時、市長として政治のあり方を教えていただいた西川正純さん、たくさんの方々からお力添えをいただいて、私はようやくこの舞台に立つことができました。原発の反対派の方々からも、推進派の方々からも、手を差し伸べていただきもう一回上がってこい、そう言われました。私は、この選択は、柏崎があらゆる、ありとあら

ゆる対立や考え方の違いを超えて、柏崎が一つになり前に進むその最初の一歩だというふうに、私は改めて位置付けています。

今日はここで一つ一つの政策を申し上げるつもりはありません。私は、皆様方と共に柏崎について26年間毎日毎日考え、そして、いただいた機会の中で政策を組み立て、もちろん、実現したものもあり、また、実現しなかったものもあります。しかし、私は、出陣式のときに申し上げました通り、この26年間一日たりとも柏崎のことを考えなかった日はありません。私は、柏崎のゴカセイ、西山、高柳の皆様方を加えてこの86000人が住む、442.03平方キロメートルという、この広い柏崎市の道を26年間かけてすべて私は自分の足で歩いてまいりました。今回は2か月という時間で、皆さんのお宅を一軒一軒歩くことはできませんでしたが、26年の中で、何回も、皆さんが毎日暮らしていらっしゃる、皆さんが毎日歩いていらっしゃるその道を、私も柏崎すべての道を歩いてまいりました。

いろんなお考えを伺ってまいりました。議論をさせていただき、対話をさせていただき、ときに激しい議論になったこともあります。しかし、私はその対話をもとめ議論をもとめ26年間進んでまいりました。私が今ここに立ち、皆様方と共に市長選挙に臨むのは、すべてを越えてそのあいだにある共有点を見出し、細い道であるかもしれないけれども、柏崎の将来、未来に向かう道を皆さんと共に歩くことによって、その道はブロードウェイ広い道になる。そう私は信じております。

先ほどの街頭演説を国道で脇でしておりました。相手の陣営の方々がずらり並んで声を上げていらっしゃいました。もちろん、柏崎の方もおられたでしょう。しかし、また、市外、県外の方も多くいらっしゃるようにお見受けしました。ここは柏崎市です。柏崎市の市長の選挙です。ぜひ、皆様方にお考えをいただきたいのは、市外県外の力で市長になって何が可笑しいんだ。

私は、そう申し上げたい。柏崎の力で、柏崎の皆さん一人ひとりの力で、一人ひとりの柏崎の声を聞いて、柏崎の市長になることが、歴代の柏崎市長が築いてきた柏崎の市政の王道である。私は、絶対に、市外県外の人間から応援されて市長になろうとする候補者に絶対負けたくはない。

皆様方のお力添えは私の力であり、柏崎の力です。皆様方の声は、柏崎の将来であり、子どもたちの未来であり、その子どもたちがまた柏崎に戻ってきてくれるような、誇りある柏崎をつくるその力となり得る、皆さんの声であります。ぜひ、皆様方、最後の最後です。あと数時間の選挙戦となります。皆様方の柏崎の力をもう少し、この私、桜井雅浩にお貸しいただきたい。ぜひ、皆様方の力で、柏崎に繰り広げられた対立の道から対話の道を、その細い道を広い道に切り開くために、桜井雅浩に皆様方のもう少しのお力添えをいただきたい。そして私が、皆様とともに、細い道を広い道にし、柏崎の将来をそして未来を子どもたちに誇り得る柏崎を、そして、お年寄りが最期を迎える時に、「ああ柏崎でよかった、本当に柏崎でよかった」そう思っていただきながら息を引き取ることができるような、安心できるまち。子どもたちの笑顔や笑い声が飛び交うまち、元気なまち。強く優しい柏崎をぜひこの私、桜井雅浩につくらせてください。お願いいたします。

２）竹内候補

市長候補の竹内英子です。私は、ここで、いよいよ選挙戦終盤となりました。まず原発について確認したのちに、違うことを話してみたいと思います。原発については、最初から申し上げている通り、再稼働は認めません。しかし、それ以前に市民の皆さんが、市の職員の皆さんが、東電原発構内で働く皆さんが、原発では事故が起きるそのことにしっかり向き合ってまだいないということを感じております。私は、市長になったあかつきには、一人では怖くてつらいことですが、みんなで向き合えば怖くない、きっと道は開ける。原発では事故が起きる可能性があるということに向き合うことから始めたいと思います。そして、柏崎のこれからの歴史をひらいていきたいと思います。ここはずれておりませんので、これから違う話をいたしますが、安心してください。原発の再稼働はいたしません。

私は、22 年間市役所で保健師をしてきて、ずっと信じていました。市民の生活の現場を見て、しっかり見て、そこでの課題をとらえる。それを提案していけば、必ず、上が理解してくれ、私は市民の生活を豊かにしていくことができる、命を守ることができる、そう信じておりました。しかし、福島の原発事故の後、この～～～には、5 年間のあいだに、けっして現場で起きていることを再認するために政治があるのではなかったのだということを痛感いたしました。市民の命を守るため、暮らしを守るために政治は機能していないと感じていました。私は今現場に、市民の暮らしの現場をよくするために、私は市政を取り戻したいと思います。みなさん、私、竹内英子といっしょに、市民の生活の現場に市政を取り戻していきましょう。これは、同じことがモノづくりの現場でも言えます。農業の現場でも言えます。そして、～～～でも言えます。私たちが暮らし命を育み、そしてお互いに大事にしあっていくその生活の現場、その生活の現場にこそ、政治の正しい答えがある。そのことを皆さんといっしょに確認したいと思います。

そのために、私は市長になりたいと思います。皆さんの力を貸してください。明日の投票日に竹内英子と書いていただき、投票してください。そうしていただくことで、私は、市民の皆さんの生活を豊かにしていくこと、命を守っていくこと、モノづくりの現場、技術のある方、技能のある方が、生き生きと働けること。農業をされる皆さんが誇りをもって農業をしていけること、そして、家族を介護している皆さんが一人で抱えず安心して介護していけること、皆さんの生活の現場で理不尽に一人で泣くことがないように、苦しんでいる人を一人ぼっちにしない柏崎をつくっていきたいと思います。

最初の話にもどります。そのために、原発に、この柏崎刈羽原発で事故が起きる可能性がある、その事実に向き合う必要があります。原発事故は弱い立場の人を切り捨てていきます。どれだけ家族を介護していた方が苦しい思いをしたか、私は聞いてまいりました。皆さん、この柏崎で、弱い立場の人が理不尽に涙を流さないようにするため、誇りをもって働いている方たちが挫折し苦しむことのないようにするため、市政をもう一度私たち生活者の手に、現場の手に戻していきましょう。

政治は今、経済やそして大きな何か、大きな力に操られている感じがします。しかし、この柏崎の規模であればもう一度市民の手に取り戻して、柏崎から、この生活の現場からの市政の革新ということをしていけるはずだと私は信じています。みなさん、この柏崎は、この

柏崎は、民主主義のお手本になるようなそんな市を願って、私に市長をさせてください。よろしくお願いいたします。

　みなさん、私、竹内英子に、この柏崎の歴史を変えていかれる先頭に立たせてください。みなさん、私と一緒にこの柏崎を変えていきましょう。よろしくお願いいたします。